

ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしゃい



第51回 ちょっと寄り道？ 縄文人の歩いた道

「縄文時代？」

縄文時代と言われて、どんなことを思い浮かべますか？

現在の東京都の大森という地域は、かつて海岸線に面した場所で、今の JR 京浜東北線が走る線路から丘を登る中程あたりで、アメリカの動物学者エドワード・S・モース先生が 1877 年に日本で初めて貝塚を発見しました。これに関連して発見された土器に、縄を転がして模様をつけたものがあったので、後に縄文式土器と呼ぶようになり、それが創られ、使われた時代を縄文時代と呼ぶようです。時にはその時代の日本に住んでいたヒト達を、縄文人なんて呼んだりします。

今回は日本列島の過去を振り返ってみましょう。

「どうやって振り返るか？」

過去を振り返ると言うと、昔のことを「なつかしいなあ」と郷愁にふけるやり方もありますが、過去を振り返るにはもう一つの方法もあります。それは郷愁にふけるのではなく、過去の出来事を調査・分析し、それがどのような影響を現在に与えているかを考察して反省することです。その行為が科学的な学問として、過去の人々が残した遺跡や遺物について行われる場合、それは「考古学」と呼ばれます。

「縄文時代のあらし」

縄文時代とは、日本列島の旧石器時代が終焉してから、稲作を特徴とする弥生時代に移行するまでの、およそ 1 万 6000 年前から 3000 年前程度の、1 万年以上の期間と考えられています。旧石器時代の日本列島には、マンモスやナウマンゾウ、オオツノジカといった大型動物が当たり前のように生息していて、人々の狩猟の対象となっていました。大型動物は移動しながら生活するので、人々もそれを追って旅をしながら暮らしていたのです。

しかし縄文時代には気候変動などの影響で大型動物は姿を消していきました。それが要因の一つとなって、人々の暮らし方も変化したのでしょう。クリやクルミのような植物の実や、ヤマイモ、ゼンマイ、ワラビなどを採集して栄養を摂ることがより重要になり、半定住から定住生活へと移行して行くのです。しかし野生の植物質の食料は、生のままでは固くて美味しくもないものや、アクが強くて食べられないものが多く、煮る、炊く、といった加工が必要になってきます。肉や魚ならば、器など無くてもそのままか、炎であぶれば簡単に食べられるのに。

そういうわけで、縄文時代を通じて人々は様々な新しい道具を生み出していきます。

そんな道具の中の 하나가、石器時代には無かった「縄文式土器」です。なんと縄文式土器は人類の歴史上もっとも古い土器なのです。

土器の登場で、はじめて固い木の実を煮て柔らかくしたり、アクを抜いたり、汁気のある料理らしい料理が可能になったのです。縄文時代には、漆を使った容器までが發明されていました。

一方で、定住生活が主となると、住居も丁寧に作られるようになりました。「竪穴式住居」が有名ですね。

「火焰式土器の驚異」

ここまで道具としての実用性から、土器を例に説明しましたが、縄文式土器にはもう一つ注目点があります。1 万年以上の間に、縄文式土器は様々な外形のものが創られ、その表面に多様な意匠がほどこされたのです。中には実用性を無視したと思えるような装飾が施されていたものもあります。そのなかでも有名なのが「火焰式土器」です。

正に炎が燃えさかっているような複雑で美しいデザインですが、一体どんな意味があるのか？ それでも煮炊きに使われた形跡もあるそうで、神聖な儀式に用いられたと考える研究者もいるようです。もっとも素人の私はこう思うんです。きっと色々試した末に、美しいからその形にしたんじゃないかと。

「考古学は静かな学問？」

このように考古学者の調査によって、縄文人の暮らす様子が詳細に調べられていますが、残念ながら、発掘という手法では調査が困難なものもあります。

例えばそれは言語です。文字を持たない文化では、言語の手掛かりは残りません。そもそも遠い過去の人々がどんな言葉を、どんな音声を発して話していたのか、全くわからないのです。

同様に、縄文の人々がどんな音楽を奏で、どんな歌を歌い、どのような踊りを踊っていたのかも。そしてそれらが、何の目的で行われたかということも。

「スマホが無ければ、イライラバツタリ？」

さて、もしも私たち現代人が突然、全くの手ぶらのまま野生の野山や草原に放り出されたら、どんな思いを味わうでしょう？ あなたはスマホとエアコンの無い人生が考えられますか？ 食べ物、着るものも全て、欲しいものが買いたくてもコンビニもネットも存在しない世界での生活を。多くのヒトは野草やキノコの採集経験もなく、どれが食べられるのか見分けもつかないでしょう。きっと何も出来ないまま、飢えと渇きで倒れてしまうのでは？

先進文明で豊かな生活を送っているはずの現代人ですが、それと引き換えに、遠い祖先から受け継いでいたはずの、多くのものを失ってきたのではないのでしょうか？

しかし、遺跡から発掘された物証が示す通り、縄文の人々は、自然の脅威にさらされながらも、勇敢に大地を切り拓き、生活に必要なものを自給自足する経験と知恵を持っていたのです。現代人には荒涼とした野原にしか見えない場所で、彼らは粘土を焼いてさまざまなデザインの器を創り出し、そしてきっと、沢山の不思議な物語や、歌、踊りを發明したのでしょう。まるで魔法のようではありませんか？

「よみがえれ。魔法の力。」

もしもあなたが博物館等で、縄文式土器や、縄文時代の道具などを見学する機会があったなら、縄文の人々が暮らす姿を、思い浮かべてみては？

あなたが暮らしている街がまだ無かった頃、この地の遠い過去を生き抜いた、勇気と魔法の力を持つ人々のことを。